

実験、観測の人材確保を

去る10月12日から16日、ミュンヘンでアメリカ天文学会惑星部会（DSP）の年会が開催された。米国の惑星協会の主催する一般講演会“The Fleet Sail for Mars”が初日の夜に開かれることになり、この講演会に招待されたのはじめて、DSPに出席するチャンスが得られた。この会議は24回目だそうだから、アメリカの天文学会の中に惑星部会ができてから24年以上たっていることになる。すなわち我々の日本惑星科学会にくらべて、すでに相当の歴史を持っていることを示している。

アメリカの惑星科学の学会としては、毎年3月にヒューストンで開催されている月惑星科学会議とこのDSP会議がメインな会議と言えるであろう。ヒューストンの会議では、この会議がはじめ月の岩石の研究を主体として始まったためか、月の岩石や隕石などの物質科学的研究の論文が多いが、DSP会議は天文学会の中での惑星部会と言う性質を反映してか、観測や探査に基づいた論文が圧倒的に多い。月曜から金曜日まで朝8時から夜6時まで2会場を使って合計45のセッションが開かれた。

さてこの学会を通じて大いに感銘を受けたことが一つある。それはこの学会の研究発表の大多数が望遠鏡あるいは惑星探査機による観測、機器開発、観測データ解析に関連したものであったことである。この種の研究発表は全体の講演数の75%と思われる。これはわが国の惑星科学の多くが計算機シミュレーションを主とした研究である現状とくらべると、著しい違いである。この会議の期間中に私に話しかけてきた人、偶然私と話をすることになった人がいずれも過去に何等かの意味で惑星探査に関係していたり、instrumentationにたいへん詳しい人であったのも新鮮な驚きであった。

科学はどんな分野でもそうであろうが、とくに惑星科学においては理論と実験と観測の3つの研究が相互作用しながら進展して、はじめて健全な発達をとげるものであろう。1990年代後半からは、火星、月探査をはじめとしてわが国でも独自の惑星探査が始まるから、理論偏重になりがちなわが国の惑星科学にも新しい風が吹くことになろう。しかし惑星探査だけでなく、さらに広い意味での実験的研究もこれからの惑星科学にとってなくてはならないものであることも疑いない。惑星探査もこのようなひろい範囲の実験的研究の結果としてはじめてよいものが生まれてくる。新しい風の流れは今でも感じられはするが、もっともっと多くの人が実験的、観測的研究に参入するようにならなければ、わが国が惑星科学に本当の意味で貢献できるようにはならないのではなかろうか。X線、光、電波などあらゆる電磁波、地上望遠鏡、気球、ロケットなどあらゆる手段、新しい技術による様々なセンサーを使った観測は、太陽系の起源と進化の謎を探るためにどうしても我々が挑戦しなければならない広大なフィールドである。

10年前には不可能だった研究も、やるとしても孤立無援で始めなければならなかった研究も、今では可能である。意欲さえあれば多くのひとの支援も得られるであろう。日本の、そして、世界の惑星科学に新しい風をあなたも吹かせてみませんか。

日本惑星科学会副会長・水谷 仁